

# 梵學津梁を論ず

泉 芳 環

緒言——編纂者慈雲——その傳記——その相承——日本梵語學の歴史——婆羅門僧正——真如親王——  
最澄空海——靈仙——圓仁圓珍——高辨——梵學津梁の組織——收載せられし文獻——評論——文典の  
不備——誤謬數條——津梁の現代に對する貢獻

## 一

邦人由來獨創力に乏しく徹底性を缺くとは吾人の屢々耳にする所、これを中世にしては支那朝鮮を摸し、これを近世にしては歐米を學び、學問技藝百般の事、要するに猿の人真似、やゝ小手先の器用さの見るべきはこれ有りと雖も、何等範を世界に示すものなきは比々みな然りと云ふ。夫れ或は然らむ。言や幾分その肯綮に中るものがあり、吾人亦遺憾ながらその全部を否定するだけの勇氣と實證を持ち合さぬ。然しながら夫れだけに偶々邦人の獨創と徹底を具有する事象に遭遇しては、更に一層の驚嘆と敬慕を禁じ得ないのである。而して亦これに對する或る程度の宣揚は吾人學徒の義務なるを信ずる。予が茲に梵學津梁に就て論ずる所あらんとするも亦この微志に外ならぬ。

## 二

抑も梵學津梁約そ一千卷は葛城の慈雲飲光及び其の門下、法護、滯濡、語明等の編纂する所、その規模の大なる、その用意の周到なる、到庭尋常凡手の企て及ぶ所でない。思を遙かに西天賢毒の域に馳せ、業を蠹蝕零帙の裡に進め、正法護持の念は澎湃として卷冊の間に漲つて居る。

慈雲(註一)とはそも何人であるか。傳によるとは彼は享保三年(1728A.D.)七月二十八日を以て生れ、文化元年(1804A.D.)十二月二十二日、八十七歳の高齡を以て歿す。諱は飲光、慈雲はその字、自ら百不知童子と號す。俗姓上月氏、父安範は播州田野村の人、その系赤松氏より出づ。安範弱冠にして大阪に移り住んだ。人となり任俠の風あり、財を輕んじ、義を重んず。その母は桑原氏、阿波國徳島の産、その親族北川又助の養女となる。又助は高松侯に仕へ、大阪米倉に職を奉じ、安範と相知るに及び深く彼の義氣を喜び、その女を配はす。その間に七男一女あり、慈雲はその第七男であつた。而して彼の生れたのは外祖父又助の家であつた。母桑原氏篤く三寶を崇め、彼が十二歳の時、河内法樂寺貞紀上人の下に剃度せしめた。蓋し上人は、母の常に崇信する高僧であつたのだから。

其後彼は諸方に遊び、種々の師に就いて學んでゐるが、梵語の手ほどきはこの貞紀に就いて習つたものらしい。それは彼の自記に成る悉曇相承口説と云ふものがある。その中に悉曇梵字の艸紙を授けらるゝことが書いてあり、その艸紙の上書きに「享保十六年甲亥七月吉祥日阿闍梨貞紀慈雲密

侶示畢」と云ふ文字がある所から見て知られる。これ彼が十四歳の時であつて、卷末には次の如き語がある。

「享保十六年亥の四月予小子十四歳の時、先師大和上に隨て悉曇を受く。其時は何も十八章の截續は此通りと思へり。其後講肆に遊んで世に謂ゆる七旦と云ふ人を叩くに多くは臆度なり。大和上は艸昏を書し給ふ皆暗記なり。他門の有様は多くは舊艸昏を見て書す。暗記せる人少なし。假令暗記の人も相傳全く無し。今日より思へば大和上徳を積み、名を隠し、懇重心を以て法を傳へ給ふ事を知る。予小子宿世何の勝業か有る。明師に遇ひ奉りて親しく指示を受く。年來多病ゆゑ、所傳を忘失せんことを恐る。故に記してこれを筐底に置く。他見憚り有るなり。明和八年辛卯六月二十二日小比丘飲光拜識小子慈雲」

これによつて見ても彼が師を敬ふこと如何に篤かりしかを知り得られ、又この貞紀の決して凡僧にはあらざりしことが推知せられる。

### 三

然しながらこの貞紀の傳はあまり明かではない。只纔かにその系統が高野山に屬するものなるを知り得るのみである。即ち悉曇相承口説の卷頭に次の如く云つて居る。

「小子十三歳の時、薙染す。翌年十四歳七月八日大和上御前へ召して云く、汝に梵字を教ふべし。

これは弘法大師より相承し來るなり。昔日醍醐山法繁昌の時、師資相承け、靜慶阿闍梨興正菩薩に付屬す。それより西大寺に相承し、高喜長老河内國丹南郡野ノ上村野中寺開山名惠猛慈忍律師に傳ふ。律師に三人の弟子あり。上座を慈門律師名信光と云ふ。河州墨村不空王寺中興野寺第二代なり。次をば慧堅戒山律師と云ふ。近江の安養寺の中興なり。次は先師洪喜攝和上なり。此三人に御付屬なり。和上は予一人に傳ふと云ふ。」

これに依つて吾人は彼が相傳の由て來る所あるを知る。然しながらこの悉曇相承口説一卷に記録する所は要するに悉曇相承に過ぎない。即ち梵字の書法に過ぎない。梵文の解讀は到底かゝるものでは出來得べくもないことは勿論である。然らば彼が梵文の解讀力は抑も何處より得來りしか。全くこれ解すべからざる問題と云はねばならぬ。

彼は京師伊藤長胤の門に經史詩文を學んだ。又河内野中寺秀嚴に就て沙彌戒を受けた。其他祕密儀軌の學習に戒龍を師とした。されどこれらは梵文に關する師でないことは明かである。果して然らば彼が梵文の解讀は師授を借らざる獨創の境地であつたと云はねばならぬ。傳には「師日夕、行願讚、般若心經、阿彌陀經等の梵文を熟讀し、皆師授に依らずして心通意解す」とある。此の如きは實に稀代の天才に非ざるよりんば能はざる所でなからうか。

予は此に於てか日本に於ける梵語學の歴史とも謂ふべきものに一瞥を興へやうと思ふ。即ち慈雲の先輩の中、如何なる種類の人が梵語を學習し、而して如何なる點までこれをこなし得たかを調査して見よう。

邦人が直接に印度に接觸すると云ふことは、交通の便なき古代に於て到底望み得べからざることであり、中間に支那を介する外に途なかりしことは當然である。然しそれにしても天平八年五月十八日、菩提僊那(註二)なる一印度僧が太宰府に到着したと云ふことは日本としては破天荒のことであつたに相違ない。彼は夙に印度を去つて支那に來り、天平五年(733 A.D.)の遣唐大使多治比真人廣成、並に學問僧理鏡等に要請せられて林邑國の佛哲等と共に東航の路に上つた。聖武帝は勅して行基等を遣はし難波に迎へしめ、供養したまふこと甚だ厚く、これより大安寺に住し、密咒を誦持し、且つ華嚴經を讀むとある。然し、如何なる華嚴經であつたか。六十華嚴は已に西紀四一八年に、八十華嚴も西紀六八〇年に譯成れるも、當時印刷術未だ起らず、頒布の範圍極めて狭小に、且つ印度僧であるからには支那譯經典を讀みしとも考へられず、恐らく梵本の一部を暗誦せしものであらう。彼は行基と相見て喜び和歌を贈答したとあれども、果してどの程度まで邦語に熟せしものか、恐らくは言語十分に通せず、邦人はとにかくこの突如として來朝せる一印度僧を極めてエキゾテイクな對象として好奇の眼で迎へたに相違ない。彼は天平勝寶三年僧正に補せられ、天平寶字四年

(780 A. D.) 二月二十五日享壽五十七歳を以て歿した。

彼は何ものをも殘してゐない。然し彼の來朝は邦人に對して直接に印度の感觸を興へたものであることは想像に難くない。

これらに刺激せられて佛教の發祥地、釋迦牟尼世尊の郷國に對する憧憬の念は多少とも邦人の胸に湧き起らざるを得なかつたであらう。これより百年を隔て眞如親王(註三)が印度に至らんとして貞觀三年(861 A. D.) 六月十九日難波を出船し、翌年七月太宰府を發して西航の途に上りしが如きも一部分これらの機縁に觸發せられたものと想像することは無理ではなからう。惜しい哉壯圖遂に成らず、空しく骨を異域の野に曝すの不幸に終つたけれども、かくの如き遠大の志望は實に我が日本の誇とすべきである。これに對して誰か邦人徹底性を缺くと云ひ得よう。

## 五

佛教梵語文獻の將來は最澄空海の入唐歸朝を以て一紀元を劃する。彼等二人は延暦二十三年(804 A. D.) 七月六日、遣唐使の四船に便乗して同時に日本を發程した。第一船には空海、第二船には最澄が乗つてゐた。第二船は九月一日明州の海岸に到着し、十一月十五日を以て長安に達した。第一船は八月十日福州長溪縣赤岸鎮己南海口に到着したが、會々福州刺史柳冕病の故に職を去り、十月三日閩濟美なるもの新に來任するを待ちて、書を贈り往復再三漸く上陸するを得たるより見れば初め

一行は上陸を拒絶せられたやうである。かゝる故障のために空海が長安に入つたのは十二月二十三日となつた。故に既に入京して居た最澄に迎へられたわけである。

最澄の歸朝は延暦二十四年(805 A.D.)八月三日である。空海の歸朝はその翌年即ち大同元年(808 A.D.)十月である。この二人は實に業績に於て伯仲し、弟たり難く兄たり難く、各々當時にありては尊重すべき文化を支那より傳へ得たのである。彼等が將來せる經疏資具はそれ〴〵目錄ありて現今尙ほこれを詳かにすることが出来る。弘法大師請來目錄(註四)、傳教大師台州越州請來錄(これは台州錄と越州錄を合冊したもの)(註五)、比叡山目錄、八家各別錄、等に收載せらるゝ所を一瞥するならばその中に幾多の梵文經典を發見することが出来る。

然し彼等に果してどれだけの梵文を解讀する能力が有つたかは疑はしい。尤も空海の如きは長安の醜泉寺に屬賓の三藏般若、及び牟尼室利、さては又南天竺の婆羅門に遇ひて印度のことを聞き若干の梵語を學び得たりと稱す。又、不空金剛の弟子曇貞より悉曇の傳を受けたりと云ふ。されど前にも云ふ如く悉曇の傳授は梵字の書法のみ、これ梵語と云ふべからず。要するに彼が梵文をよく解し得たりとは考へられない。

それよりもこの頃日本の一沙門にして靈仙なるもの、醜泉寺に於て大乘本生心地觀經の譯場に列し、翻經の業に携つてゐたことが特筆に値する。靈仙の傳はあまり明かに知られてゐない。この事

蹟も近年石山寺寫經の卷尾の識語によつて端緒を得たものである。このことは無盡燈第二十卷第一號に松本文三郎博士によつて記述せられ、大屋徳城氏によつて彼が延暦二十二年入唐した證跡が發見せられた。延暦二十二年は最澄空海の入唐に先つこと一年前である。然しこの時の遣唐大使藤原葛野麿、副使石川道益は四月十四日に難波を船出したが、風浪の爲めに果さなかつたのである。靈仙が單獨に出船して入唐したとは考へられないから、彼はこの時入唐の筈であつたのを延期して恐らくその翌年即ち最澄空海等と共に出發したのかと思はれる。彼は名聞を好まず、榮達を漁らず、黙として智識の獲得に勉めたものであらう。六年の後に彼に心地觀經の譯場に筆受の業に就き得たことは考へられぬことではない。この隠れた偉材は惜むべし何人かに毒殺せられ、異郷の土となつてしまつた。實にこれ亦邦人の誇とすべき一人たるを失はぬ。

## 六

その後入唐沙門に圓仁(794—864 A.D.)註五)あり、圓珍(814—891 A.D.)あり、圓行、惠運、常曉、等將來する所の中に梵語佛典が若干ある。これら資料を前にして當時の佛教學徒は如何なる態度に出でたか。固より彼等にはこれを開拓すべき文典辭典の佳良なるものが恵まれてゐなかつたとはいへ、多くは一指だもこれに觸るゝ能はず、只これらを焼香禮拜してゐたに過ぎなかつたことは亦何ぞ夫れ迂なるやと云はざるを得ない。



三井寺の安然(884 A.D.)には悉曇藏なるもの八卷がある。これは清和帝の勅によつて選述せし所と云ふ。されど所論晦澁にして明確を缺き、剩へ種々の牽強附會を敢てせりとは後年慈雲門下によりても指摘せられて居る。後人を惑はしむるもの寧ろ無きに若かずである。一斑を以て全豹を推すに當時の學徒の無知なることは明かである。この間に梅尾の高辨(1163—1232 A.D.)が古墳典の蒐集と保存に努力せしことは多とすべきだ。後代稀觀の文書多くは高山寺の藏書より出づ。自ら讀み得ざるものを蒐集に致すは賞讃に値する。彼は元久二年春同志と共に支那印度に趣かんとし、準備已に成つて疾のために果さず、乃ち海潮に足を浸してこの海水遙かに印度の岸と連る、吾が足亦これを踏むに等しと云ひ遺憾の情を慰めたと云ふ。これを近世にしては明治の福田行海上人、南條博士の足を頂きて「みほとけの御跡踏む足尊しな」と詠せしと好一對の搜話である。

これより後、多少著作の上に梵文の影響あるもの、心覺(1181)、泉寶(1306—1382)、宥快(1345—1416)、印融(1435—1519)がある。淨嚴(1639—1703)は譜曲に達し、理趣經の譜曲を訂正し、これより梵音の研究に觸れ、當時梵語を解するものなきを慨して自から大にこれに當り、常明(1760)は梵文阿彌陀經を開板し、慧晃(1684)は枳橋易土集を編して藏中の梵語を収録し、寂嚴(1703—1771)亦若干の著作あり。これらに就ては、論すべきもの無きに非ざるも、要するに彼等の研むる所は悉曇字記の解釋に非ざれば陀羅尼句義の範圍を出でない。これを大成して組織を與へしものは慈雲の梵學津梁であらねば

ならぬ。

されば畢竟慈雲以前に慈雲なく、近代のことは別として、慈雲以後に慈雲なしと云はねばならぬ。

## 七

梵學津梁は全卷を七部門に分ち、これを本詮、末詮、通詮、別詮、略詮、廣詮、雜詮と名けて居る。この部門に編入せられたる内容は如何なるものであつたか、今七九略鈔（卷一左）によつてその規定を擧ぐるならば左の如くである。

「本詮者錄諸具文也。末詮者解其本也。通詮者聲明所要。別詮者古今諸師撰集。略詮者略標名句。廣詮者委悉解釋。雜詮者彙撫示要。及諸異途等。總攝名曰梵學津梁。」

これによれば、本詮とは資料の蒐集である。この中に在來日本に傳はつてゐる梵本の寫本をあらん限り集めたものである。末詮とはその解釋である。即ち資料を譯讀して意義を明かにする演習である。通詮は文典であり、別詮とは在來の梵語關係の書籍を網羅したものである。此に驚くべきは、略詮と廣詮である。これは辭典の部門である。否適當に云ふならば辭典編纂の計劃である。即ち略詮の中へは出來得るだけの梵語の名辭を字母順に収集し、それを廣詮の中で解釋したものである。次に雜詮は前の六部門の中の補遺と梵語に直接關係はなくともその参考書となるべきものを收めて居る。

先づ本詮收輯の資料は次の如くである。

弘法大師請來四十二卷(註四)

八家秘錄所載八十六本(註五)

和州法隆寺所藏貝葉二葉

海龍王寺一葉

洛西清涼寺一葉

城州調子瑞泉寺一葉

當寺一葉

近江坂本之寺三葉

更搜之字内當得二三十葉

彌陀經三本

般若心經廣略俱存

行願讚三本

最勝王經陀羅尼等

新舊譯經中陀羅尼並梵名

梵學津梁を論ず

總東當得衆多今概而爲三百卷

末詮の中には左の如きものを含む。

- 七佛名諸譯互證一卷○緣起法身偈諸譯互證一卷○賢聖名諸譯互證十卷○佛十號諸譯互證一卷  
附諸通號○三十五佛名諸譯互證附諸佛尊名○十二因緣諸譯互證○十二部經諸譯互證○法華陀羅尼諸  
譯互證○四十二字門諸譯互證○十六大菩薩讚互證二卷○彌陀經諸譯互證二卷○普賢行願讚諸譯  
互證二卷○般若心經諸譯互證一卷○序流通具足般若經諸譯互證一卷○佛三身讚諸譯互證一卷○  
三摩耶偈諸譯互證○明鏡金篋輪法螺偈諸譯互證○大佛頂陀羅尼諸譯互證一卷○大隨求陀羅尼諸  
譯互證○尊勝陀羅尼諸譯互證二卷○寶篋印陀羅尼諸譯互證一卷○千手千眼陀羅尼諸譯互證一卷  
○青頸觀世音陀羅尼諸譯互證一卷○國界名諸譯互證二卷○諸天名諸譯互證一卷○法衣名諸譯互  
證一卷○諸伽藍名諸譯互證○諸艸木名諸譯互證一卷○諸外道名諸譯互證一卷○諸惡趣名諸譯互  
證一卷○諸心々所名諸譯互證一卷○定諸名諸譯互證一卷○篇聚諸名諸譯互證○三十二相諸譯互  
證○八十隨好諸譯互證○三十七品諸譯互證○五十二位諸譯互證一卷○四果四向諸詮互證一卷○  
彌陀經釋四卷○心經釋三卷○普賢行願讚釋五卷○註大佛頂陀羅尼一卷慧雲請來○如意輪陀羅尼義  
註一卷不空○尊勝陀羅尼釋一卷法崇○仁王陀羅尼釋不空三藏○仁王陀羅尼釋良黃○金剛界陀羅尼釋  
五卷○胎藏法陀羅尼釋五卷○百字真言釋一卷○真言王釋一卷○三部四處輪釋一卷○百光遍照

釋一卷以上合爲一卷○彌陀大咒釋一卷○釋迦眞言釋一卷○藥師眞言釋一卷○五智名釋一卷○七佛藥師名釋一卷○十二光佛名釋一卷以上合爲一卷○大佛頂陀羅尼釋三卷○大隨求陀羅尼釋三卷○光明眞言釋一卷○施俄鬼陀羅尼釋一卷以上合爲一卷○戒日王八大雲塔讚釋一卷○十六羅漢名釋一卷○五篇六聚名釋一卷○三衣名義一卷○瓶鉢諸具名義一卷以上合爲一卷○諸讚頌釋三卷○三摩耶秘釋二卷○明鏡偈釋一卷○金篋偈釋一卷○法輪法螺偈釋一卷以上合爲一卷○佛頂略句義等更容衆多凡九十七卷但匆率列之未得精詳。

## 八

予はこれらの書目を丹山文庫發見の梵學津梁總目から寫し取つたのであつて、この註記に依つて見ても梵學津梁の卷數は確定的のものでないことが知られる。要するにこの末詮といふ中では本詮の資料を解釋せんとしたものである。即ちこの部門は文典的解釋を以て講讀の演習をやるといふ計劃なることを示さば足る。

次に通詮凡そ八十五卷、これは文典に相當する。然し文典と云ふにはまだ餘程距離のあるものなることは後に評論しようと思ふ。この中に七九鈔十卷、同略鈔三卷等のあるを注意すべきだ。

別詮はやはり文典的部門であるが、通詮の最も緊要にして權威あるものなるに對し、諸家の撰述を收載したものであらう。安然の悉曇藏や景祐の天竺字源を收めてゐるに徴してこれが知られる。

尙ほこの中に辭典の資料とも云ふべき左の文書が收められてゐる。

梵語千字文 義淨

同異本

唐梵文 吉祥子金眞

梵語雜名一卷 禮音集慈覺請來

翻梵語十卷 義淨

梵語雜集 曇衍

枳橘易土集 慧晃

次に略詮廣詮の二部門は恐らく未完成のまゝであらねばならぬ。

雜詮中に見ゆる果實の創學鈔、淨嚴の三密鈔、寂嚴の悉曇稽古錄二卷の如きは別詮の補遺であり行願聞書十卷、法華梵釋一卷智證大師述の如きものは末詮の補遺らしく、新井源君美の采覽異言だの、徂徠の滿字考だの、その他泰西圖說などの書目が見える。これらは雜詮として適當なものらしい。法顯の佛國記、玄奘の西域記、義淨の南海寄歸傳、西方學法までも網羅してゐる。

以上によつて梵學津梁が果して如何なるものなるかを概略紹介し得たと思ふ。一言以て云はゞあらゆる資料を文典と辭典と諸家の研究とを以て整理し講讀し翻譯して諸種の研究を産み出さんとす

る一大研究機關の計劃である。これは一の百科全書であり、叢書でもあり、圖書館でもあり、研究室でもある。

これだけの計劃がこれだけの規模の下に故障なく十分に進められて行つたならば梵學の振興は期して待つべくその業蹟や日ならずして實に華々しきものを舉げ得たに違ひない。

彼が慫うした企圖を以て門下を督勵して研鑽に従事してゐた時は、恰も英國（註六）が東印度會社を組織して印度の經營に當り、ウイリアム、ジョーンズ等の學匠が相次いで輩出し、印度文學が歐州に紹介せらるゝに至る黎明期に相當することは一面非常に興味あることではなからうか。予は世界を動かす機運と云ふべきものに一定のリズムが存在してゐるのではないかと云ふやうな信仰——迷信かも知らぬ——を捨て能はぬ。このリズムが世界各處に種々の人を動かし、種々の事業を促進せしめる。慈雲も亦このリズムに動かされ、梵學津梁はこれに促進せられて成つた——こんなことが斷定を許されるならば非常に興味がある。さうでもない限り彼が非凡偉大な天才的技倆を説明することは不可能である。

## 九

彼の企圖や佳し、津梁の規模や大、その取りし研究方法も決して悪くない。それは現今の語學研究者のそれと態度に於て同一である。即ち資料を整理し、譯語を相當の個處に排置し、文典法則を

立て、辭典を成立せしめる。これより以上に取るべき方法は無い。さりながらその計劃も惜い哉種々の先入見と牽強附會のために妨げられ、適確な文典法則が未だ出來上つて居ない。隨て語彙に完全な説明を與へ能はずして止んだ。これはやはり結局資料の缺乏に原因すると云はねばならぬであらう。

津梁の文典的知識は纔かに唯識樞要や慈恩傳中に引用せらるゝ八疇九例がその根抵であつた。而してこれすらが適當に理解せられて居つたとも思はれない。而してその基づく所の支那の論疏引用にかゝる文典的知識たるや、またあまりにも貧弱極まるものであることを遺憾とする。

支那に於ては羅什、玄奘、義淨を始め譯家の龍象數に於て決して少くはない。而して大藏數千卷の翻譯事業は大成せられた。それにも拘らず何等梵語の文典の完全なものが見出され能はぬといふ事は、抑も何たる不可解なことであらうか。蓋し是れには譯場制度の然らしめた所と想像される。即ち三藏梵文を取りて譯出口授すれば筆受者これを記述して潤文證義に回附し、かくて忽ちに卷冊をなせしものらしい。次には漢字が性質上音韻を寫すに適しない。音韻的なる點に於ては朝鮮の諺文、日本の假名遙かに漢字に勝る。而もローマ字の最も適當なるには及ばぬ。漢字に至つてはその不便その不完全實に言語道斷と云ふべきだ。音韻的に整備せる梵語梵字を寫すに最も不都合を極めた漢字を以てせねばならぬことは、語學として梵語の發達を妨げた大なる理由であらねばなら



ぬ。かくて支那佛敎翻譯界に一の梵語文典を見ず、津梁をして資料の缺乏に苦しましめるやうな結果となつた。津梁の學匠達はこれでもかなり精一杯に努力したのだ。然も如何せん、何等の據るべき文典が惠まれてゐなかつた爲め、その解釋全く見當を外れてしまつた。

以下具體的實例に就て津梁の誤謬を擧げ、これが評論を試みよう。津梁に出づる文典的説明を一々評し來れば殆んど總てが誤謬であり牽強附會である。若し夫れ訂正を加へんか全卷殆んど完膚を餘さざるに至るべく、予としてもそれは全く繁に堪へぬ。それで、以下若干の綱目を擧げて津梁の根本的誤謬を的示し、以て一斑より全豹を推知せしむる方法を取るとしよう。

予豈辯を好まんや、又徒らに古人の非を發き、過を擧げて快を叫ぶものならんや。然しながらこの大著は後代の範となり、後の學者多くは梵語の解釋をこれに取つて居る。諸種の經典論疏の註釋も講錄も闕し來れば悉くこれによつて梵語を解釋してゐる。我々の先輩の學匠達みな然りである。他の義解に於て識見に於て予は素より莖才その器に非ず、これら先輩に負ふ所多きは勿論、常にその業蹟に敬服を惜むものでない。然しながら過誤は苟くも許すべきでない。况や一盲衆盲を引いてその過誤止る所を知らざるに於てをや。予が評論批議は必ずや慈雲をして地下に歡喜せしむべきを信ずる。又然らずんば慈雲は眞に慈雲に非ざるべきである。

## 一〇

(一)八嘽聲に關して正確なる理解を缺く。津梁は八嘽聲が格語尾の曲法であることを明瞭に意識してゐない。例へば第二嘽業聲と云へば目的格であることを明確に知らざる爲め、梵文阿彌陀經の最初に出る世尊即ち薄伽梵を「第二嘽聲也、今正是說教<sub>ノ</sub>世尊<sub>ヲ</sub>、故以<sub>ニ</sub>業聲<sub>ニ</sub>呼<sub>レ</sub>」と釋してゐる。これによると正しく說教の世尊だから說教といふ作業をするから業聲であると云ふのだ。格は語基の意義と何の關係も無い。一文章として他語に對する關係を定めるものだ。世尊が說教の世尊であらうとなからうと、そんなことは如何でもいゝ。只Bhagavāの語形から判斷し、一文に對する主語と認めたら體聲と決定せずして何とかする。「ある時世尊<sup>○</sup>は舍衛國<sup>△</sup>……に住したまひき」とすればこそ意味がわかる。この世尊を業聲即目的格として「ある時世尊<sup>△</sup>を舍衛國……に住したまひき」と譯して果して何の詮顯する所があるか。無意味である。

尤もこの誤謬は薄伽梵の字形からこれを婆伽婆と比べ、はねる音を含むものは體聲でないと思ひ込んだ結果から來たのである。それで古來の悉曇學者は婆伽婆を體聲薄伽梵を業聲と誤認してしまつた。この誤認を理由づける爲めの牽強附會が說教の世尊なるが故にと云ふやうな形を取つて現はれたのだ。

八嘽聲の例示は大般若波羅蜜多經第四百九十八卷、瑜伽師地論第二、唯識樞要上本、大慈恩寺三藏法師傳第三、探玄記第三、悉曇藏所引の有則の最勝正辨、根本薩婆多部律攝第二等にある。然しこ

れらはほんの例示であつて全部でない。これらを一讀して見ると探玄記の書方が頗る曖昧である。こゝらあたりから誤解が生じたらしい。

(二)八轉聲に種々の形式あるを知らず、一様に<sup>ハ</sup>語基を以て擬せんとせしこと、現に薄伽梵は<sup>ハ</sup>なる尾を有する一種の形式なるを知らざるため、これを唯識樞要や慈恩傳に出づる補廬沙の例に當てたのが誤りであつた。樞要の娑婆 Bhavat に當てたならばよかつたのである。然し八轉聲の形式には少くとも八九種類を分つ、これを熟知せずして梵文を取扱はんとするが抑も無謀の擧である。

(三)語基構成の場合の三性の變化を八轉聲の場合のそれと混同せること。七九略鈔卷一(四丁右)「十轉中不生(註七)寂靜等聲爲<sup>ニ</sup>男聲、根災禍等韻爲<sup>ニ</sup>女聲」と云ふ。この意は語末の<sup>ハ</sup>名詞は男聲<sup>ハ</sup>の名詞は女聲だと云ふので、これが已に亂暴極まる推測だが、これは一先づ寛假するとして、これらの名詞を其のまゝ八轉聲と見做してゐることは不都合である。例へばかの悉地と悉曇を説明するに、悉地は(註八)第七轉悉曇は第二轉と云つてゐる如きである。悉地は Siddhi で女性名詞の語基、まだ八轉聲の語尾を附せざるもの、悉曇は Siddhan ならば命令法三人稱單數爲自言語根 sidhi にしてこれ全く別異のもの、八轉聲の法則を以て律すべきでない。

(四)九例に對する根本的誤解。九例とは所謂丁彦多聲である。即ち動詞の活用變化で、先づ三人稱と三の數が豫想せられる。これに對する明確なる知識なきため、これを八轉聲の一種であるか

の如く見做し、只徒らに説明を複雑ならしめてゐる。この九例は源と慈恩傳第三に例示されてゐる。これも單なる例示であつて委曲を盡してない。のみならず其處には不可解な説明が施されてゐる。即ち「其丁彦多聲、於文章壯麗處用、於諸汎文亦少用」とあるのがそれだ。これによれば丁彦多聲即ち活用變化は壯麗な文章に用ひ、普通一般の文章にはあまり用ひないと云ふ。果して然るか。梵文の性質上格變化を用ふることは活用變を用ふるより幾分多いには多い。それは分詞形が非常に多く用ひられるからである。窺基のこの説明大體その意を含むものであらう。然しそれにしてもちと言ひ過ぎの嫌はある。文章莊麗と否とによりてこれが用らるゝことの多少を決定すべくもない。これが俑をなして津梁をして「佛說法多依蘇漫多、意依於義、不依於文、又被一切故也」七九略鈔卷一(三右)との臆説を吐くに至らしめた。窺基は玄奘の愛弟であつたとはいへ、ごうも梵文の解力に於て疑はしい。「依阿答末泥九轉者、於前九轉下、各置毘耶底言、(註九)餘同上、安此者令文巧妙、無別義、亦表極美義」と云ふが如きも解すべからざる説明である。

瑜伽倫記卷五上(五十左)に底彦多聲に上土中土下土ありと云ふやうに見えてゐるのも誤解を起し易い説明である。これは確かに一人稱と二人稱と三人稱のことであらねばならぬ。津梁亦この上中下の語に迷ひ附會の説を種々に設けてゐる。依るべきでない。

(五)品詞に對する正當なる概念なきこと。これは支那文の弊から來たものである。支那の文は一

字一語が動詞でもあり、名詞でもあり、形容詞ともなる。調寶なこともあるが曖昧を免れない。津梁が梵文を分解し説明するや、これ動詞これ名詞これ接續詞と明確に指示し能はざるため、誤に墮せること屢々である。動詞の活用變化を名詞の格變化で説明したり、複詞を名詞のやうに見たり、文章は脈絡を失ひ、意義は漸く支那譯に助を求めて通ずるといふ有様、支那譯に吻合せざる時は附會の解釋を設けるか、投げ出すかより途なきに至る。その最も極端なる一例は接續詞 *ca* の解釋である。津梁はこれを「衆」と「等」と對譯するより他に方法を知らざる爲め、梵文阿彌陀經の冒頭舍利弗や目連の名の次にこの語を見て舍利弗目連は各その眷屬を率ゐて會座に連るといふ附會の解釋をなすに至つた。

(六) 語根を以て分解の單位とすることを知らぬ。例せば七九略鈔卷一(二十三左)に納逢索迦即ち *napunṣaka* (中性) の解釋をなさんとして、*upāsaka upāsika* を例となし *saka* (原本には *ska* に誤る) を奉事の義と云ふ。*upāsaka upāsika* に奉事の義あるは語根 *upās* の意より見るのである。何ぞ語根の *āpa* にかゝる義やあらむ。津梁の附會凡そこの類である。この他語と字の區別を知らず、語の解釋に窮すれば例の四十二字門(註七)や五十字門の字義を持ち出して解釋する。許すべからざる本末顛倒である。

(七) 十囉聲(註一〇)の概念なきこと。動詞の時と法とを規定した十囉聲なるものが、單に名目だけ

は南海寄歸傳に出て居るけれども、これを詳説してない爲めにその何ものたるやを知らなかつた。後年になつて長谷寺の法住(1733-1800)は攝八轉義論と云ふものを書いてゐるが、その最後に「此是十囉無<sub>三</sub>典據具說<sub>三</sub>其音義<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>唯竺漢<sub>一</sub>、和邦先進皆以不<sub>レ</sub>言、無<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>解」と云つてゐる。蓋しこれが偽らざる本音である。附會の解釋をなさんよりは寧ろ投げ出すが却て無難だ。

## 一一

さて、以上の綱目中に大略津梁の中の誤謬を擧げたつもりだ。一々を例示することは繁雜でもあり、且つ無知に對して鞭を加ふことは大人氣ないから及ぶ限り簡單にしたのである。只前にも叙べた如く、後人をして誤らしむるなからんために黑白の判断を加へるのである。Dost'v'ic'ya' s'utor' ad' 「過誤は師に對しても擧げらるべし」この意味に於て恕せらるべきであると思ふ。

過誤は過誤なれども全く止むを得ざるものである。資料なく、教師なく、孜孜獨學を以てこの天地を開き、或る點までこれを成就したその功績は決して没すべきではない。

果せるかな彼慈雲の没後凡そ百年を経過して明治十三年には梵文阿彌陀經は日本より英國に送致せられ、マツクスミューレルによりて校讀せられ、その校刊を見るに至つた。廣略般若心經、尊勝陀羅尼亦然り。後年普賢行願讚も渡邊海旭氏によつて校訂せられた。その他八大雲塔讚は柳亮三郎博士によつて、吉慶梵讚は不肖なる予によつて、夫々修正公表せらるゝに至つた。これらはみな世界

何れの處にも今日では見るを得ざる文書であつて、日本のみかその存在を誇り得る特權を有する。而してこの誇は先輩諸學匠、特に津梁の編纂者たる慈雲の上に歸せらるべきものである。蓋し彼が不世出の偉材を以てこれを蒐集し、整理し、保存したればこそ後昆はこれによりて利せらるゝに至つたのである。彼れ微りせば文書は已に湮滅して夙に其傳を失せしやも計り得ない。

彼が蒐集せる津梁の文書中、未だ尙ほ修正せらるべき貴重なるものは尠しとせぬ。これは後進の學徒の前に殘された價值ある事業である。今や當年に比すれば文典あり、辭典あり、研究の難易、便不便、到底同日にして論すべきでない。學徒一たび奮勵して起たんかその業蹟をして昔日の二倍三倍ならしめんも強ち難事ではない。切に諸君の勉旃を望む。(昭和三、二、一二稿)

(註一) 慈雲の傳は明和三年七月晦日布薩後教誥、慈雲尊者略傳、續日本高僧傳、日本佛家人名辭書に見えたり。

(註二) 菩提僧正碑文、續日本紀、七大寺年表、元亨釋書、本朝高僧傳、日本佛家人名辭書。

(註三) 傳記は日本佛家人名辭書四六四頁、其他本稿に出づる高僧の傳記に關しては特別の記載なき限り日本佛家人名辭書を参照せり。勿卒の間これを原書に推求して確定する能はず。委しくは後日の研鑽に譲る。

(註四) 弘法大師請來目錄一卷(正安版覆刻)谷大藏本、餘大六〇八。大同元年十月二十二日入唐學法沙門空叢の識語あり、十六葉右以下、善賢行願讚、大佛頂眞言、大隨求、少隨求、大寶樓閣、吉慶讚、梵字悉曇章等全四十二部の語見え、二十九葉右に梵夾三口右般若三藏告曰吾生緣闍賓國也少年入道云云。

(註五) 八家各別錄なるもの一卷(谷大藏本餘大三六〇四)青寫眞、この中前行の下に唐梵文字一卷開解此文字一二年間堪翻經とあり。又梵字普賢善薩行願讚一卷、梵字悉曇一卷、梵夾二具、一具中天竺三藏雜陀付授、一具靈山大德弟子付授とあり。

惠運の下に梵本般若波羅蜜多心經一卷、醴泉寺般若三藏梵本、梵譜、大毗盧遮那如來菩提讚、梵本普賢行願讚と見えたり。最澄に關しては傳教大師台州越州請來錄二卷、義眞、日本大藏經第四〇冊の内にあり。その台州録の中、大佛頂陀羅尼隨求陀羅尼、般若心經梵本(漢字)一卷とあり。又比叡山目錄なるものあり、その卷尾に比叡山寂澄和尚法門道具等目錄弘仁二年七月十七日寂澄永納の語あり。中に吉慶讚見えたり。

又圓仁、圓珍に關しては、天台入唐請來目錄一卷(谷大藏本餘大一七六四)あり。圓仁の下に梵漢兩字阿彌陀經一卷を始め其他二葉に亘りて梵經を擧ぐ。二十六丁左圓珍の下には中天竺大那蘭陀寺三藏曼素悉陀羅梵夾一、大那蘭陀寺佛殿前貝多羅樹皮梵夾一云とあり。

和州法隆寺所藏貝葉は現行梵本般若心經及尊勝陀羅尼の底本となれるものにして *Anecdota Oxoniensia, Vol. I, Part III, The Ancient Palm-leaves* に收む。其他海龍王寺等の貝葉は現に牛津大學圖書館にその謄寫本を藏せり。これ明治十三年日本より送られたるものにして *Bodleian Library* の目錄に載せらる。

(註六) 英國の東印度會社 *The East India Company* が印度に鞏固なる地位を占めたのは十八世紀の頃なり。かくてワーレン・ヘースティングスの快腕を揮ひてベンガル總督の榮位を得るや、大に波羅門僧を督勵して印度古法典の翻譯を始め、ウィルキンスはヒトールバヂーシヤ及薄伽梵歌を英譯し、ウィリアムジョーンズはシャクンタラーの英譯を出す。これ一七八九年なり。又彼はマヌの法典の出版及英譯を出したり。

(註七) 不生、寂靜、根、灾禍等の名を字母に命名せるは悉曇字記に始まるも、この種の方法は藏經中に屢々散見する所なり。主なるものを擧ぐれば左の如し。

華嚴經入法界品(善知衆藝童子の下)

方廣大莊嚴經、普曜經(釋尊幼時就學の下)

大集經第十

守護國界經第三

大般若經第十九

文殊問經第十四

大日經第一



涅槃經南本盈七(四十三右)、北本盈五(四十二右)、盈九(三十右)

その方法語首或語中に或る字母の含まれたる如き語を選び、以てその含まれたる字母の解釋と見做す。例せば字母 $\rho$ の意義を解釋せんためにはこれを語首となせる語 *anurhā* (不生) を選び、或は $\rho$ を解釋せんとしてこれを語中に含める *āra* (支分) なる語を選び、以て不生の $\rho$ 字、支分の $\rho$ 字などと呼ぶ類なり。かゝる方法は始め印度に於て幼童が字母を學習するに當り、その記憶を助くる方便として行はれたるものなるべし。然るに後世、佛教に於てこの方法を生死解脱の法門の解説に應用するに至り、字義字相の觀法を生ずるに至れり。この種の説明は已にウパニシャッドの中にも見出され、又第十世紀頃にアレキサンドリアを中心として榮えし猶太教グノス説新プラトン説等の混成せしかバラ教と云へる祕密教の中にも存在す。

然りと雖もこれ單なる字母の命名に過ぎず。これより辭典的の意義を引出さんとするは太しきの謬想なり。

(註八)

悉地と悉曇とを混同せるは常に見受くる誤なり。南海寄歸傳の悉地囉窣視は *Siddhirastu* にして「成就あれ」の義なるに、これを *Siddhanrastu* と書けるもの多し。*Siddham* はよしとするも、*rastu* とは何といふことぞや。かくては竟にその義知るべからず。*astu* にして始めて語根 *as* の命令法三人稱單數爲他なるを知るべきのみ。

(註九)

毗耶底の言とは蓋し *vyati* なるべし。文典を案ずるに爲自言を用ふる場合に *kanna-vyati-hira* 即ち或る種の人にとりて爲すべからざることをなし、若くは相互交換の意あることを含む時これを用ふとあり。例せば

*Brahmanah sasyan vyatimrite*

婆羅門が穀物を刈り取る。

穀物を刈るが如きことは首陀羅の仕事にして婆羅門の爲すべきにあらざるなり。故にこの場合に *vyati* の語を置きて爲自言を用ふ。又

*Sainpraharante rjānah* (諸王は互に打てり)

の場合相互動作なるが故に爲自言を用ふ。

慈恩の説明はこれらのものを意味するなるべし。語尾變化は爲他爲自全く異る。「餘同上」の語解すべからず。思ふに何か誤傳あるべし。

Samuel Beal の慈恩傳の英譯を見たるが、此の下何等の説明もなし。彼も解し得ざりしものゝ如し。

(註一〇) 十羅聲は十個の *la* 字を冠せる文典用語なり。即ち *le*(現在)、*le*(第三過去)、*le*(第二過去)、*le*(未來)、*le*(第二未來)、*le*(命令法)、*le*(可能法)、*le*(希願法)、*le*(條件法)、*le*(吠陀に用ひらるゝ條件法)これなり。